混凝土道路（二）

金森誠之

「何て圖々しくなつたんだらうね、お前義理と云ふものを知つてゐるかい、この母親に苦勞ばかりさして！」

「さあおいで、――云ふ事を聞かないと痛くするよ」

手荒く美智子の手を捕ふや、腕が拔けさうに迄引つぱる誰の借金であらう、何の義理であらう、養母として、美智子を喰物にした丈けで、何の苦勞をしたらう、然し。纖弱い彼女にはどうする事も出來なかつた。

工事場では、ミキサーは旺んに廻轉してゐる、鍋トロは次から次へと運ばれて行く、混凝土を敷き均すもの、突き固むるもの、丸で戰場の樣な活躍さである。

十米宛に切つた鋪裝の一區切りがついた時であつた、大宮はミキサーの休みに、愛する美智子はと、ふと掃除して

―一〇―

工事場に働きに出る樣になつてから、美智子には樂しい日ばかり續いた、此頃の空の樣に澄み渡つた朗かな氣持ちで、何の苦勞もなく、唯若しや養母が捕まへに來はしまいかと云ふ暗い影が時折頭をかすめる丈けであつた、其の暗い影は眼の前に表れたのである、大宮から道で出會しても知らぬ顏をしてるんだよと常に聞かせられてゐるから此の際は知らぬ顏をして、せつせと帶を動かして居た。

「お前何故返事をしないんだよ、借金を其儘にして逃げ出すなんて丸で泥棒だよ」

「……」

る方に眼をやると、美智子は、養母らしいのに引つ立てられようとしてゐる。

大宮は何處をどう飛び越へて走つたのか、知らなかつた、夢中で美智子の方へ飛んじ來た。

「この婆！　何しにこんな所へ迷ひ込んだんだ仕事の邪魔をすると承知しないぞ」

美智子は、急いで大宮の影にかくれる。

「何さ、お前さんこそ餘計な所へ口を出さないでおくれよ、これや妾の娘なんだからね、娘を連れて歸るのに他人のお前さんに、口を出して貰ひますまい」

「何を！　知らぬと思つて母だなんて大きな口を聞きやがる、鬼ばゞ！」

「美つちやんのお母さんは死んだんだ、其の後で可憐さうに鬼ばゞに浚はれたんだ――そういつ迄も鬼ばゞの喰ひものになつてゐるかい」

其の騒ぎを見つけた人夫達は道具などを引つさげた儘飛んで來た。

！へろことなんこしに何ゞばのこ

「クソばゞ、のしちやえ！」

誰かゞ、叫んだと見ると、スコツプだの萬能だのを振り上げて、今にもお松を叩き殺しさうに迫つて行つた。

この樣を見たお松は今迄こんな荒々しい連中を見た事のないから腰をぬかさんばかりに驚いて丸で一言も口をきけず、一目散に逃げ出した。

連中は面白がつて、ワイ〳〵追ひかけかゝつたが、深追ひする必要もないから、

「クソばゞ、おとゝひ來い」

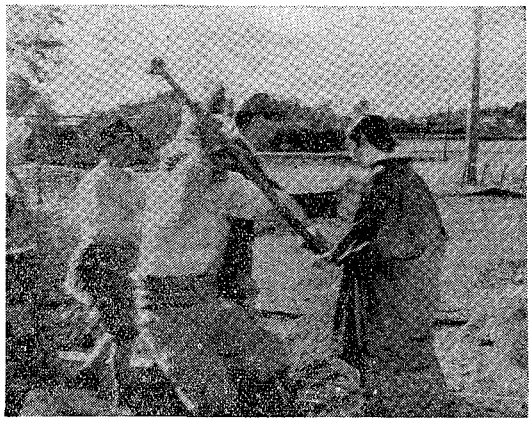
と、どなりながら、ワイ〳〵面白がつて、仕事場へ歸つて行つた。

タムパーで叩くもの、木蛸で固むるもの聲を揃へて、去りやらぬ餘憤に、

「クソバヾ！クソバヾ!!」

と笑ひながら仕事がつゞけられて行く通りかゝつた工夫頭も、笑ひながら、

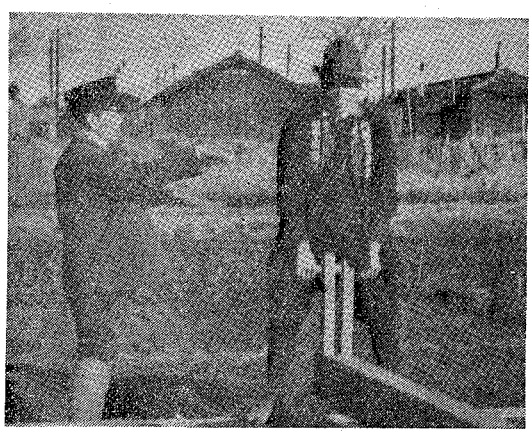
「餘計な事を云はないで、水がしみ出る迄丁寧に搗くんだよ、堅練りだから、搗き堅めは大切だよ」



「クソバヾのしやちこ！」

と注意しながら、過ぎて行く。

三輪ローラで均らされて行く、後から木蛸だのハンドタムパーだので丁寧に突き堅められてゐる



！迄る出みしの水でいなは云をとこな計餘

タムパーで横斷勾配を丁寧に拵へ、特に縱斷勾配は平常から「道が出來上つてからの自動車の動搖は縱斷が平でないからだよ」と技師から八ケ間しく云はれて居る丈けに、常工夫はテムプレーをあてながら、入念に表面を仕上げて行く。

―一一―

美智子と大宮の第七天國はとても樂しいものであつた。役所から歸ると愉快な夕食を共にして、大宮は學校へ、美智子は人夫達から頼まれた針仕事に、毎夜毎夜が續いて行く。

學校から歸つた大宮は直ぐ其の日の復習にかゝるのであつた、今夜も大宮は一生懸命に勉强してゐる、下宿の下の時計は十を數へた

「隨分お精が出ますのねえお茶でもいれましようか」

「あゝもう濟んだんだよ。復習したいから美つちやん、路面の仕上げの話をきいてくれないか」

「えゝ聞くわ、妾も仕事場を見てゐるからきつと判るわ」

美智子は返事をしながら甲斐々々しく大宮の洋服をたゝんだりなどしてゐる、

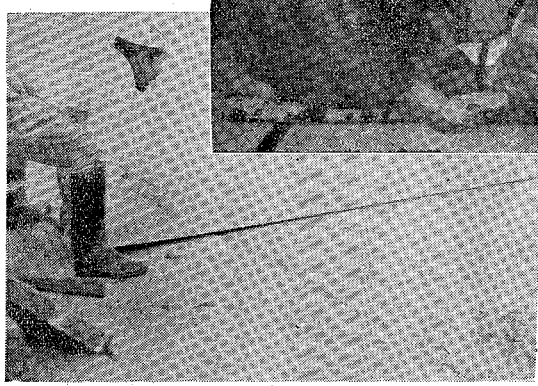
「フロートで仕上げるにはね、フロートて木のコテの事だよ」

「えゝ知つてるわ」

路面仕上げの話は色々つゞけられて行く。

「それからねベルトでも仕上げられるんだよ」

あらくすぐつたいわ



「美つちやん一寸」

とまねき寄せながら、大宮は側にあつた帶皮で美智子の膝を「コンナにこするんだ」とこすつて見せる。
「あらくすぐつたいわ」
美智子は大宮から帶皮を取つて自分でこすり、
「こうでしよう妾見たわ」
フィニッシャーの話だの、運轉の有樣などが手に取る樣に說明されて行く。
美智子の今迄の世界では話題はいつもどこも汚い物であつた、惚れたの、はれたのから、段々話が下つて行つて、其の座に居たゝまらなくなる事さえ度々であつた。
今聞いてゐる技術の話、美智子には物心ついてからの初めての美しい話であつたそしてそれが、毎日の仕事にピッタリと合つて聽ては工事の爲めに役立ち、國の爲めにもならうと云ふのであるから、嬉しさに感激して眼頭が熱くなつて來るのであつた。
「こんな話伺つてゐると妾、何だか嬉しくつて涙が出て來るわ」
美智子は涙をふきながら、熱情に炎えた眼で大宮を見上げる。
「兄さん勉强してもつとえらくなつてね」
二人の手はいつの間にやら堅く握られてゐる。
「えらくなるよ」
引き寄せるともなく、寄るともなく、二人は相擁して、嬉しさにひたつてゐる。
「指輪がありましたらばねえ」
「いゝえ指輪がなくなつたればこそ二人はこうなれたんだよ」
「そう云へばそうねえ——」
夜も更けて行つた、遠くで支那そばの笛は靜かに聞えて來る。

——二二——

殊の外美しい天氣である。美智子は早くから混凝土に被せた蓆に水を撒いてゐる。

「何故水を撒くのか知らん」

美智子は大宮からこの話を聞いた事がなかつた、餘り水を撒き過ぎると、混凝土が弱かくなるのでないかと心配にもなる

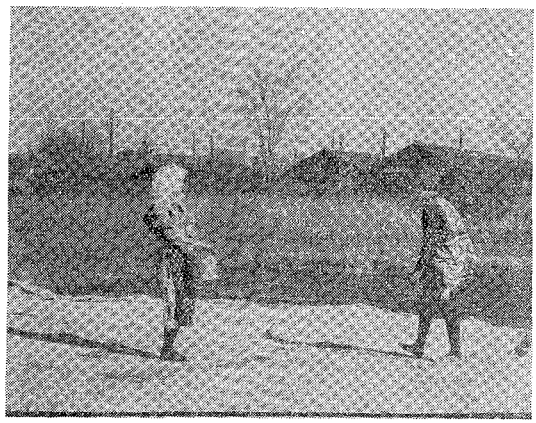
「妾これ何してんの？」

折柄通りかゝつた人夫に聞いて見る。

「水を撒いてるんじやないかお馬鹿さんだねえ」

と野次られる。

「水を撒いてるなんか尋ねてやしないわよイーだ」



妾これ何してんの

……をトルアフスアでふ向ラホ

野次り野次られながら朗かに笑つてゐる、丁度仕事場へ急いで居た大宮は此の樣を見てほゝ笑みながら、やつて來る。

「それはね混凝土の養生と云つて混凝土の堅まるまで少なくも三日位は乾かさない樣にするんだよ」

丁度試驗的に各種の養生法をして居たので其の方を指し

ながら、

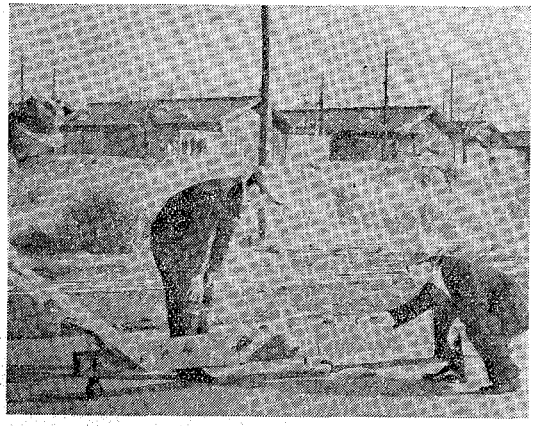
「ホラ、向ふでアスファルト乳劑を撒いてゐるだらう、タールなんか撒いてもいゝんだ」

「それからずつと向ふに、土を被せてる所もあるだらう、混凝土の表面が汚れるが、道路なんかはあゝしても良いんだ」

「そう判つたわ」

「乾いた所を殘さない樣にね」

「えゝ注意してやりますわ」



凸凹があるとヴアンポメーターの針が動く樣に！

大宮は技師の待つてゐるヴアンポメーターの方へ走つて行つた。

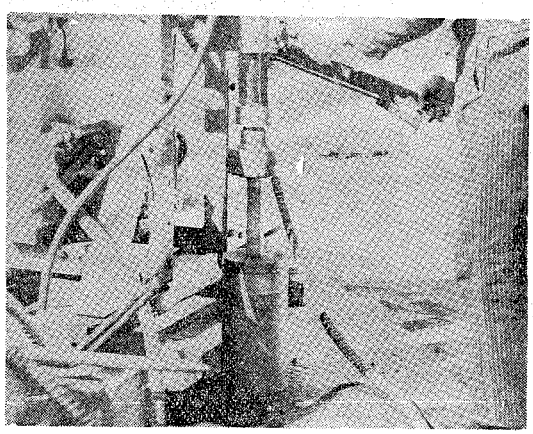
―― 一三 ――

「君、これはヴアンポメーターと云つて路面の凸凹を調べる機械だよ。

技師はヴアンポメーターを動かして見せる。

「凸凹があると針が動く樣になつてゐるんだ」

「これで出來上り道路の平かどうかの成績が判るんだ、そ



ステイプスー採取機

金森誠之一作品
コンクリート
道路

この映画を通して道路
なくうしてコンクリート
で鋪装する方を判って頂き
たい
原作・脚色・監督
金森誠之

れからね、向ふにコンクリートを切つて見る機械があるから君に一つ運轉して貰ふ」

二人は連れ立つて行く。

大宮によつて混凝土テストピース採取機は運轉されて、出來上つた混凝土がだん〳〵切られてゐる頃、事務所へ二人の面構へのスゴイ男二人を連れた女が這入つて行つた。

事務所前で工夫頭と出會したので女は、

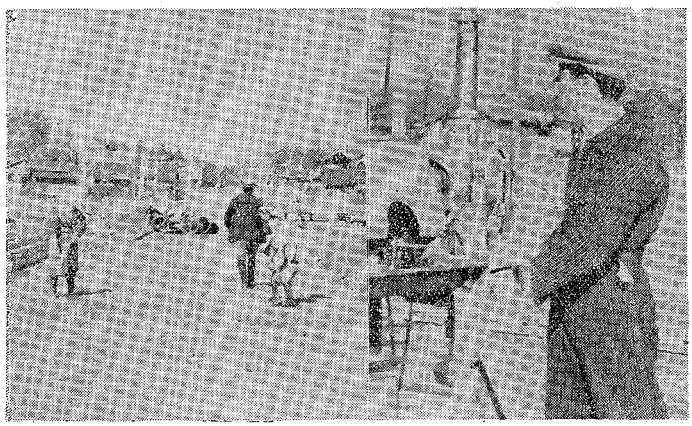
「あの、こちらにゐる美智子と云ふ女人夫を受取りに來たのですが！」

と頭を下げた。

工夫頭はこの間の騒ぎから色々の話を聞いてゐるので、

「仕事中だからダメだよ、歸れ〳〵」

とニベもなくはねつける。



これを聞いた二人の用心棒は、こゝぞとばかりに、

「何を！　仕事もクソもあるものかい、他人の内の娘を――」

今にも打ちかゝらうとする、工夫頭が危いと見た人夫がかけ寄つて來て亂闘が初まらうとする。

事務所でこの騒ぎを耳にした役人は飛び出して來て、双方をなだめながら、女に話を聞く、

「妾の娘の美智子と云ふのが、この母を捨てゝこちらに逃げて來てるんです、そして此の間も――」

云ひも終らぬに工夫頭はイマ〳〵しげに、

「何コイツは母でもなんでもないんですよ」

と口を出す。
「役人は兩方を制しながら、
兎に角娘を呼んで來な」
と人夫に云ひつける。

―― 一四 ――

採取機を運轉して居る大宮がふと見ると、人夫が美智子を呼びに來て、走りながら連れられて行く、機械が廻轉して今一息で切れてしまいそうになる。
「混凝土もワケなく切れてしまふもんですね」
「こうして切り取つて見るんだから、今では仕事をゴマかす事が出來ないんだよ」
事務所での事件を知らぬ大宮は、切れ行く混凝土を面白さうに見てゐる。

―― 一五 ――

「そう云ふ譯でしてね、養母は養母ですが、これには相當の金も掛つてゐるんです。
娘を渡してくれないとすると、役所なり誰かから二百圓頂きたいんです、そうすればカツフエーの方も話がつくしもう奇麗に他人になりますよ」
聞いて居た役人は、美智子の方を向いて、
「誰か金を出してくれるかい？」
と聞く、大宮に話せば何とかしてくれるかも知れないが其の收入を知つてゐる丈けに茲に大きな苦勞をかける事になる、又大宮を呼んで貰つても、役人も出て來て裁きをつけてゐる丈けに、此の間の樣な譯には行かない、そして又若し茲で騷ぎが起つて、それが基で大宮が役所を止めなければならない樣になつては尙更困る、小さい胸を痛めながら、かすかに首を横にふる、
「役所にはそんな金が出せないから、仕方がないからまあ行くんだね」
事情を知らない、役人は美智子を母親の手に渡す。
「二百圓持つて來れば何時でも美智子を渡しますよ」

と聲を殘して、荒くれ男に挾まれながら美智子は養母に手を取られて引かれ行く。

……　……　……　……

混凝土が切れた、其れを挾み出して、技師は其の寸法を計つて見せる。

「厚さは十八糎あるだらう」

「それからねこれを壓縮機にかけて」

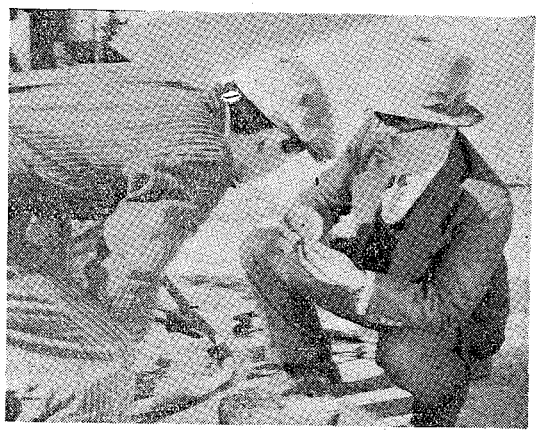
と兩手で押へて見せようとした時、何だか、混凝土の裏に異樣なものが手に感じる。

美智子は引かれて行く！

「オヤ？」

混凝土を裏返して見ると、何であらう、燦然たる光、土を落して見るとダイアモンドの指輪でないか、

今では全く舊態を存せぬ迄に地形が變へられ居るがこの邊が恐るべき惡道路であつた頃、大宮の自動車が泥穴に片輪を落して、舊停車をした所ではないか！



それは美ちやんの指輪だ！

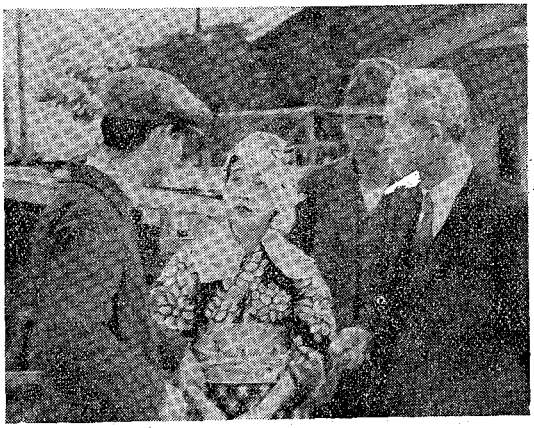
「それは美ちやんの指輪だ」

大宮は思はず叫んだ。

大宮から話を聞いた技師はそれはきつと美智子の指輪だらう、殊にイニシアルもちやんとついてゐるからに間違ひがなからうと斷定した。

「それにしても大したもんだ、安くも三千圓はするに早く持つて行つてやり給へ」

受取つた大宮は、大喜びで足が地につかぬばかりに走つて行く。



二百圓と云ふ大金どうするつもり

大宮が事務所の前に着いた時は丁度美智子が三人に連れられて門を出ようとする時であつた。

「何處へ連れて行くんだ!!」

あまあ嬉しい!!

思はず叫んだ聲に美智子は養母の手からするりとぬけて大宮の影にかくれる、荒くれ男達は何をこの野郎とばかり大宮に打つてかゝる。

憐れに連れられて行く後姿を見送つて居た役人は飛んで來て、其の間にわけ入つて大宮に向つて云ふ、

「娘を渡すか、二百圓出すかて云ふんだ、娘を渡すより仕方なからう」

大宮は勝ほこつた樣な顔をしながら、

「美智子は渡しませんよ、

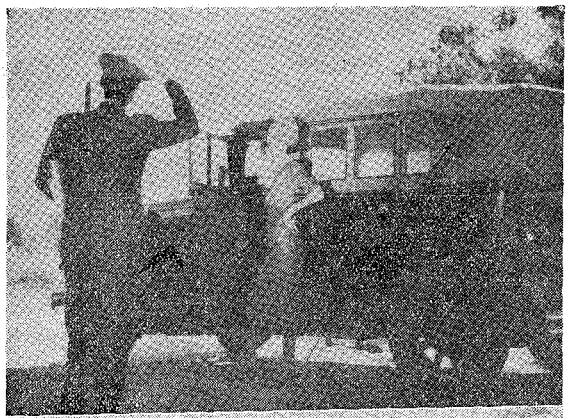
二百圓ポッチ耳を揃へて渡しますよ」

聞いて居た美智子は豫期した通りの大宮の言葉に感激しながら、然し大宮に苦勞をかけまいと、大宮を見上げて、

「二百圓と云ふ大金どうなるつもり？」

「苦勞をかけてはすまないから妾行つて來ますわ」

大宮から離れて養母の方へ行かうとする、



あたらしく先生に送られて流浪の旅へ

「美つちやん！」

「大丈夫だよ、指輪が出たんだ！

技師さんの話にいくら安くも三千圓はするダイアモンドだつて！」

取り出された指輪、其の光の玹ゆさよ、夕日に映えてキラ〳〵ときらめく、

「まあ！　妾嬉しい」

二人は思はず相抱いて喜ぶのであつた　なみ居る人々も唯あつけに取られて、歡喜に滿ち〳〵た二人を見とれてゐるばかりであつた。

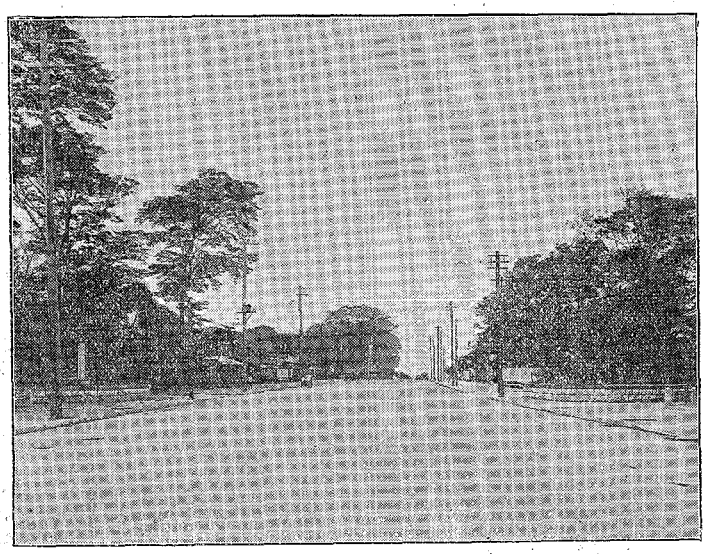
混凝土道路の竣工した、坦々として砥の如しとの昔からの形容詞はこの道で初めてあてはまるのであらう。

走つてゐる自動車は丸で鏡の上をすべつて行く樣に、今迄は黄塵に色を失つて居た道沿ひの樹々も、今は青々として　美しいカーヴに沿つて其の間を走つて行く。

美智子の指輪は金に代へられて　自動車となつた、工事が終つたか、大宮は其のハンドルを採つて圓タクを稼ぐ

美智子も運轉の免狀を取つて今では其のハンドルを持つ樣になつた。

「あんたを先學校へ送つてから後流すわ」

美しい洋裝美人の運轉手には客も多い事であらう、晝間は美智子が働いて、大宮が學校へ通ふ事になつてゐるらしい、卒業の曉には成功した二人の家庭には更に幸多い事であらう。

二人をのせた自動車はこの美しい道路を走つて、小さく〳〵消えて行く。（終）